

拝啓、融けゆく世界へ #7. 5

鳥沼 憂

【これまでのあらすじ】

降る雨の九七%が人をも融かす酸性雨と化し、十年前の「第二次世界大天災」による被害が色濃く残る2XXX年の東京。A.C.I.D.（対天災国際防衛省）に所属する十七歳の青年・天海快晴は、天災を引き起こす怪物「天魔」を狩る「調停士」として、自身の平穏な生活を奪った天災への復讐のため、日夜天魔との戦いに身を投じていた。七月、「雨宿りの村」と呼ばれる隠れ里への遠征にて、天海の妹・照は自身の生まれ持った性質「天ノ巫女」の真実を明かされる。遠征から帰還した彼女は、どこか思い詰めているようで――

☆過去作バックナンバーはこちら☆

- #1・2（プロローグ）……………R4年度新入生歓迎号
- #3（梅雨晴の戦い・前編）……………R4年度創苑1号
- #4（梅雨晴の戦い・後編）……………R4年度創苑3号
- #5（雨宿りの村編①）……………R5年度創苑1号
- #6・7（雨宿りの村編②・③）……………R6年度OBORG  
レベル「イニシエイティブ」1号

【主な登場人物】

天海快晴……天災を起こす怪物、天魔を討伐する組織《A.C.I.D.》の戦闘員『調停士』である十七歳の青年。妹の照を溺愛している。十年前の《第二次世界大天災》により左目の視力を失っており、眼帯を付けている。

天海照……快晴の妹。黒髪のサイドテールで、常にレインコート等の雨具に身を包んでいる。《第二次世界大天災》で被災した後遺症が遺っており、基本的に

《A.C.I.D.》東京支部の医務室にて保護管理下に置かれている。「天ノ巫女」と呼ばれる、雲を晴らすことができる能力を持つ。

神宮寺陸斗……天海ら調停士の戦闘等をサポート・バックアップする調停士補佐官。ブロンドの髪を後ろで束ね、青縁の眼鏡をかけている。東京支部全体の副隊長でもある。幼くして両親を失った天海兄妹の親代わりのような存在。

日暮風沙……東京支部の新人調停士兼メカニック。ピンクの髪をツインテールにした小柄な少女。機械いじりとかわいいものが好き。快晴に密かに（？）恋心を抱いている。

\* \* \*

「……………違う、これでもない……」

A.C.I.D.<sup>アシッド</sup> 東京支部内に存在する共用エリアのひとつ、天災資料館。支部職員らが対峙する天災について、過去のデータや研究論文などが集められている場所だ。といつても、多忙の合間を縫ってまで小難しい書籍を読むに來るような職員はよほどの生真面目か、物好きか、必要に迫られて嫌々、といった具合だった。

そんな資料館の隅に設けられた「オーディオ・ブック・スペース」に、ひとり腰掛けて頭を抱える少女の姿があった。雲を晴らし天魔を払う力を持つ『天ノ巫女』であり、調停士補佐として務める少女、天海照である。十年前に発生した第二次世界大天災で被災し、視力をほとんど失っている照は、調停士用自律型AIデバイス『セル』のサポートを受けつつ、耳での情報収集に励んでいた。

「……ううん、やっぱり『天ノ巫女』についてのことなんて、村で聞いた以上のことは載っていないのかな……」早速りのボタンに手をかけながら、照は喉を鳴らす。両耳にイヤホンを挿し、集中するために目を閉じていた彼女は、完璧に外界の情報をシャットアウトしてしまっていた。後ろから誰かが迫ってくるのがあっても、全く気が付かないような――

『ピピピピピピピ――』

「うわっ!?!」

突如、けたたましく警報音が鳴り響いて、ガタン、と

背後で大きな物音がする。とっさに立ち上がった照の前に、彼女を庇うように「Tel」が浮遊する。

『警告。背後カラノ急接近ヲ確認』

彼女の「Tel」に備わったサポート機能——持ち主の意識が向いていない状態で何者かが急接近すると、警告のアラームが鳴る安全機能——が発動したらしい。警戒姿勢をとる照の足元で、物音の主がもぞもぞと動き出す。

「つてて……ごめんごめん、ちよつと驚かせようとしただけなんだって」

「……その声……亜真理さん、ですか？」

声を聞いた照は拍子抜けしたような顔で、「Tel」のアラームを停止する。

水無瀬亜真理。長身ですらとしたスタイル、青みがかった長いグレーの髪に、ラメの混じった青いアイシャドウが特徴的な、東京支部に所属する調停士のひとりである。昨年までは西欧支部にいたため、東京支部の人間としてはまだ日が浅いのだが、持ち前の人当たりの良さと茶目っ気のある性格で、東京支部の人々ともすぐに馴染んでいた。

「照ちゃんがこんな所にいるの、珍しいなって思ってた。

ボクも人のこと言えないけど」

水無瀬はぺろりと舌を出す。照からしても、水無瀬と資料館というのはどうも結びつくイメージがなかったの

だが、それは互いに同じなのだろうと微笑む。

「実はちよつと、調べたいことがあつて。なかなか資料がなくて、困つてたんですけど」

「えつ、こんな本だらけなのに？ そんなに難しいこと調べようとしてるの？」

照の席には既に、何十にもオーディオ・ブックが積み重なつていた。データの入った薄い本型の板にイヤホンの先端を挿すだけなので、厚みは通常の本の五、六分の一程度しかない。嵩はそれほどにしても、照の取得した情報量は相当なものはずだった。

「えつと、前に『雨宿りの村』へ遠征したときに、アマ……天ノ巫女についての伝承を知っている方に、話を聞いてきたんです。それで、やっぱり天災を止めるには、巫女の力を万全に發揮できるようにならなきゃいけない、つて言われて」

照が『天ノ巫女』と呼ばれる力を持つ者であることは、A.C.I.D.内および調停士各位に限り公表されている。雲に潜み雨を降らせる怪物・天魔にとつて、太陽の光は他の何よりも有害であつた。危機的な状況を彼女の力により打開できたことも、調停士らにとって一度や二度ではない。

しかし、まだ十四歳の少女である照の身では、その力を扱うには負担が大きかった。加えて、照が生まれつき患っている「気象病」——低気圧の接近を感知すると、

ひどい頭痛や吐き気などに襲われる症状——もあり、むやみやたらに力を使うことはできなかった。

「かつての『天ノ巫女』が、どのように力を目覚めさせたのか……それが分かれば、少しは私も巫女の力をうまく扱えるようになるんじゃないか……と、思つたのです」

『天ノ巫女』については、詳しいことはほとんど知られていなかった。巫女だと思しき存在が、晴乞いの儀式を行い民を救つた——程度の伝承は残っているものの、その実態については謎が多く、情報を集めようにも難しいところがあつた。

「うーん……ボクの元いた西欧支部でも、そういう力を持つ人はいたんだけど、詳しいことは全然知らないんだよね。ごめん、力になれなくて」

申し訳なさそうに掌を合わせる水無瀬に、照は大きく首を横に振つた。

「いえいえ、とんでもないです。私ももう少し文献をあたつてみます……大天災が起こる前に、少しでもこの力を、万全なものにしておきたいので」

そう呟く照の顔は、普段よりどこか思い詰めているように水無瀬の目には映つた。もともと責任感の強く真面目な少女ではあつたが、今の彼女は何かに迫られているような焦りすら感じられた。

「……そうだな、お偉いさんや天海には怒られるかもしれ

れないが——」

水無瀬は悪戯っぽく微笑むと、照のすぐ隣に腰掛ける。

テールに肘をつくと、彼女を諭すように囁いた。

「業を身につけるには、やっぱり実践あるのみ、じゃない？」

\* \* \*

「——で、俺らの任務に同行させろというわけか」

照と水無瀬は作戦遂行のため、調停士部に振り分けられた共用部屋へと向かった。彼女らが向き合っているのは、体長二メートルはゆうに越える巨漢、伊勢島狭弥刀。糸のように細い目を僅かに吊り上げ、二人を見下ろしている。

「無理なお願ひなのは重々承知です。でも、私も巫女として……調停士補佐として、力をつけたいんです。お願いします」

深々と頭を下げ、訴えかける照。側にいる水無瀬も一緒に頭を下げ、訴えかける。

「照ちゃんが力をつけてくれれば、調停士部としての戦力も向上することになるでしょ。悪い話じゃないと思うんだ」

「それもそうだが……」しかし伊勢島は腑に落ちない様子で、懐疑的な目を向ける。

「大体、神宮寺や天海には言ったのか、このことは」  
「……………」

示し合わせたように同時に目を逸らす二人を見て、伊勢島は「だろうな」とため息をつく。

「神宮寺はともかく、あの兄バカの前でそんなこと言ったら、こっちの首が飛びかねないよ」

水無瀬は冗談めかして肩をすくめる。照の兄で水無瀬や伊勢島の同僚である天海快晴は、妹のことになるとやたらと過保護になるきらいがあつた。照が本来は頼れるはずの兄に一切の経緯を説明していないのも、こんな話をすればまず止めにかかるだろうと確信していたからだ。

「あいつを抜きにしたって問題はある。もし彼女に何かあつたら、誰がどう責任を取るんだ。『天ノ巫女』は、アノコにとつての最終兵器なんだぞ……」

至極真つ当な言い分で水無瀬に迫る伊勢島。と、そこへ部屋の扉が開き、その場にいる誰よりも高い声が響いた。

「失礼しまーす……って、て、テルル!？」

伊勢島はその声を聞くなり、嫌そうな表情を包み隠そうともせず「げつ」と発する。間違いなく事態が面倒になる雰囲気を感じ取ったからだだった。

「その声は、ラムザさ……」

照が挨拶をするよりも早く、バケツを被った小柄な少

年——「一条ラムザ<sup>いちじょうらむさ</sup>八久留<sup>やくる</sup>は、照の前に跪く。

「テルル——いや、天海照さん。ああ、いつもは機械越しにしか聞こえない君の声が、今日はこんなに近くから——オイラがこの扉を開いたのも、きつと君の前に現れるためだったんだ。つまり僕と君は結ばれる運命で、テルル、オイラと結婚してくだ——あ痛っ」

長々と語られたプロポーズの言葉は、ゴォン、という伊勢島が彼のバケツを引っ叩いた音で、さながら喉自慢大会で失格が告げられるように遮られた。

「毎度のことながら、よくそんなつらつらと言葉が出てくるな——」

感心したような、呆れたような表情で、一部始終を見ていた水無瀬は呟く。ラムザは好意を持った異性にすぐ求婚してしまう癖があり、その度に伊勢島がこうして強制停止させているのだった。

「いてて……ああ、アマリも一緒だったんだ。ちえー」

ずれたバケツを元の位置に戻しながら、ラムザは頬を膨らませる。彼のバケツは口と鼻の境目までをしつかりと覆っており、目線の高さには覗き窓のような細長い穴が空いている。一応は防水・防酸加工なのか、レインコートのフード代わりに雨を凌げるようだが、そもそまなげバケツを被っているのかは謎だった。

「ちえー、ってなんだよ、照ちゃんをここまで連れてきたのはボクなんだけど」

ムツとして言い返す水無瀬。見た目こそラムザとは比較にならないほど大人びているが、精神性はさほど変わらないようにも見えるな、と伊勢島は内心で毒づく。

「えっ、そうなの？　なんで？」

一方のラムザは、やはり照がこの場にいることを不思議がって尋ねる。彼女は普段医務室から出てくることの方が少なく、ましてや調停士の使う部屋——くつろげるような場所ではなく、ミーティングや出撃準備を行うような、実務的なスペース——を訪れることなど滅多になかった。

「ええと、実は——」

照はこれまでの経緯をかいつまんで話す。この時点で、伊勢島は嫌な予感をひしひしと感じていた。

「……なるほどね。巫女修業のために、オイラたちの任務に同行したいってことか」

「はい。お兄ちゃんや神宮寺さん、他の職員さんたちに言えば、まず反対されると思うので……なるべく、ご内密に」

照は申し訳なさそうに縮こまりながら頼み込む。が、伊勢島は険しい表情を崩さない。

「気持ちには分かるが、大事な巫女様を危険な目に遭わせるわけにはいかないな。今回のことは諦めて……」

そう伊勢島が切り出したところへ、被せるようにラムザが大きな声を上げる。

「テルル、その役目……オイラたちに任せてよ!!」

「……は？」

胸に拳を当ててふんぞり返るラムザに、何を言っているんだ、と冷やかな視線を投げる伊勢島。だがラムザは一步も退かず、さらに声を張り上げる。

「テルルがこんなに頑張ってるんだから、オイラたちも協力してあげるべきだよ! なっ、アマリ」

「うん、ボクもそう思うよ。上の人たちが反対するだろうからって、頭ごなしに否定するのは冷たいんじゃないの？」

「……都合が良いときの結託だけは強いな、お前ら」

意気投合した水無瀬とラムザは伊勢島に迫ろうとするが、伊勢島は怯むことなく言い放つ。

「水無瀬はともかく、お前は照さんに近付きたいだけだろ」

「づっ」

分かりやすく「凶星を突かれた」リアクションをとるラムザ。とは言っても、その場にいた彼を除く全員にとつては概ね予想通りの反応だった。

「ね、お願いサミィ。オイラちゃんとテルルの面倒見るからさ」

「ったく……目離したりしねえか? ちゃんと責任持つて見られるのか?」

「ペット飼いたい子供じゃないんだから」

身長差も相まって微笑ましい親子の光景にしか見えず、水無瀬は思わず失笑が漏れる。

「その……皆さんにご負担をかけることになるのは、分かっています。ただ、色々考えたのですが……力を付けるための方法が、亜真理さんの言うこの方法しか、思いつかなくて」

照は自らの不甲斐なさを詫びるように、目を伏せながら話す。しかし、その次の言葉には確かな芯が宿っていた。

「……大きな天災が、またいつ起こるかも分かりません。その時まで、少しでも力をつけておきたいんです。事が始まってから、後悔しないように」

「……テルル」

それまでは(大方の予想通り)邪な気持ち半分だったラムザだが、照の真剣な表情に感化されたように、今度は落ち着いた口調で伊勢島を見上げる。

「サミィ……やっぱりオイラたちで、テルルに協力できないかな。何かあったら、オイラがテルルを守るからさ」

「……………」

しばらく押し黙っていた伊勢島だったが、バケツ越しの視線に押され、大きくため息をついた。

「……しょうがねえな。ま、巫女様の力を覚醒させるつてのは、求められていることには違いねえからな」

「サミィ……!」

「ありがとうございます、伊勢島さん！」

ラムザは一層高いトーンの声で感動を頭にし、照は深いお辞儀で感謝の意を述べる。隣の水無瀬も「ありがと、伊勢島」と嬉しそうに微笑む。

「おっと、感謝するのはまだ早いぜ……そもそも、この作戦が実行可能なかは、また別問題だ」

「うっ、そうだよね……テルル、気象病のことは大丈夫なの？」

彼女の患う気象病は、低気圧に近付けば近付くほど症状が強くなる特徴があった。天魔は災雲の発生源であり、そこへ自ら近付いていくのは傍から見れば自殺行為にも思えた。

「それに関しては大丈夫です。一時間程度なら、事前に薬を飲んでおけば、症状を抑えられるので」

照は懷からパウチされた錠剤を取り出し、ラムザに見せる。水無瀬と伊勢島も、横から興味津々に顔を寄せる。

「えっ、そんな薬あったんだ？」

「はい。ただ、症状の出る一、二時間前に飲まないと効果がないうえに、抑えられるのも一時間程度なので、普段はあまり使う機会がないのですが」

「随分とピンポイントな用途なんだな」

災雲（天魔）の発生がいつ、どこで起こるか予測が難しい以上、事前の服薬が必要なこの薬で症状を緩和するのは難しいのだろう。

酷な話をすれば、そもそも彼女の気象病こそが、支部の人間にとつては災雲発生予測装置の役割をしているのだ。良くない見方をすれば、簡単に症状を抑えさせないよう、意図的に薬の効能を制限しているのかもしれない……そこまで出かかって、考えすぎか、と伊勢島は首を横に振る。

「なるほどね。じゃあ後は……監視の目、つてとこかな」

そう言うと、水無瀬は照の側をふよふよと浮かぶ、てるてる坊主型のAI搭載デバイス……「Tel-Tel」に手を伸ばす。指先で軽く触れると、拒絶されたように静電気が走り、思わず手を引っ込める。

彼女を含めた調停士全員が所持する「AIデバイス」。

「Tel-Tel」には、他の調停士や職員と通信を繋ぐ機能もある。基本的には電話のように応答しない限り繋がらないが、万一のときには一方的に相手の映像を映すこともできる。許可もなく照が支部の外に出ているとわかれば、すぐさま映像を繋げられてしまうだろう。

だが、盲目の彼女にとって「Tel-Tel」は盲導犬のような役割も果たしており、身から離しておくことも難しかった。

「施設内で動く分には、監視や補助がかかることもないので、事前に調べ物で資料館へ籠るなど言っておけばいいのかと思うのですが……問題は、お兄ちゃんの方で」  
「げ、天海って休日でも照ちゃんの監視してるの？」

水無瀬が眉間に皺を寄せて尋ねるが、照は不思議そうな表情で少しの間を置き置く。

「監視というか、居られる間は極力一緒にいる、くらいですけど……そのくらいは変じやないですよね？」

「俺らを『普通』と見ていいのか分かんが、一般的にはあまり普通じやないだろうな」

伊勢島が常識的な目線のツツコミを入れるも、当の照はきよとんと首を傾げ「そうですか？」と呟く。

「うわー、ボクだったら耐えられないかも。そこまで干渉されたくないな」

「アマリ、自由人だもんねー。管理したがりのアマミとは相性悪そう」

伊勢島は目の前のバケツを小突いて「お前もな」と言いたいところをぐっと堪え、話を元に戻す。

「今日みたいに任務に出ていくれるなら、それが一番望ましいんだが……そう都合の良い時がいつ来るか分からないしな」

ううん、と唸る一同。「アマミがテルルのことを気に留めない、留められない状況を作るってことでしょ？あのアマミに限ってそんなこと……」

「……気に留められない、か」

ラムザが発した言葉を、反芻するようにゆつくりと発音する水無瀬。何かを思いついた様子で、悪戯っぽく顔を綻ばせる。

「どうしたんだ水無瀬、不気味な顔して」

「不気味って何さ、失礼だね」

伊勢島にからかわれ、不服そうに声を低くする水無瀬。だが直後にはけろりと元の表情に戻り、「良いこと思いついちゃったんだけどさ」と嬉しそうに囁く。

「要は天海に、照ちゃんのことを気にする隙を与えなきゃいいんだよ。だから――」

\* \* \*

「カイせんば——天海せんばーい、早くー！」

「待て、日暮………ったく、荷物がかさばって動きづらいな」

九月某日、場所は東京都内、支部から三十分ほど電車に乗った先にある複合ショッピング施設。調停士部の一員である少女・日暮風沙が、人混みをものともせず突き進んでいく。その後ろを、左目に眼帯をつけた大荷物青年が、うんざりした顔で追いかける。

この青年こそが天海快晴、A.C.T.D 東京支部所属の調停士で、「天ノ巫女」である天海照の兄であった。いつもは丈の長い灰色のレインコートに身を包んでいるが、明らかに任務という雰囲気ではない今日に限っては、長袖の黒シャツに麻のパンツとラフな格好をしている。

「……ハア、どうして俺がお前の買い物に付き合ってや



らないといけないんだ……ショッピングモールくらい一人で行けるだろう」

「えー、でも照が一人でお出かけしたいって言ったら、天海先輩も着いて行くじゃ……」

そう声に出して、風沙はハッと手で口を押さえた。天海はそんな彼女の言い分に弁明するかのごとく啖呵を切る。

「照が一人で出かけて、何かあったらどうするんだ。」

「[e]」[a]があるとはいえ他人のいる場所は危険だし、万が一変な輩に狙われるとか、襲われるとか、取り返しのつかないことが起きたら——」

「あつ、あー！ あそこでブランドバッグのセールしてる！ 急がないと——！」

「っ、おい！ 待てと言ってるだろ！」

わざとらしく興奮した声を上げて駆け出す日暮。天海の呼びかけにも速度を緩める様子はなく、天海は大きくため息をついた。

「……どうしても着いてきてほしいと言われたから来たものの……断るべきだったな」

当然、彼女との（一方的な）「デート」の裏に仕組まれた計画のことなど、彼は知る由もなかった——

\* \* \*

都内某所、街からは少し距離のある、離れの公園。大型免許持ちの伊勢島が、ラムザと水無瀬、そして照を乗せた対天災用車両「天車」を走らせていた。

「お兄ちゃんたち、今頃デートを楽しんでるんでしょうかね」

「うう、アマミばかりずるいなー。テルルのためだから仕方ないけどさー」

ラムザが口をとがらせて愚痴をこぼす。風沙も彼にとつては求愛の対象となる相手で、風沙が見るからに想いを寄せている天海のことをライバルのように思っているのだった。

風沙が天海のことを好きなのは、彼ら調停士仲間の中では半ば周知の事実であった。本人は否定したが、彼女のあらゆる態度が莫大な愛を物語っているのである。そんな愛を利用する訳でもないが、水無瀬が立てた作戦は「出撃当日、風沙に天海をデートに連れ出してもらう」というものだった。もちろん風沙本人には作戦のことは伝えており（デートに関しては「天海と出かけて、照のことから気を逸らせていてほしい」とだけ言っている）、彼女には今日一日天海を振り回してもらう予定である。

「でも、照ちゃんも風沙ちゃんに嫉妬しない？ 大丈夫？」

水無瀬が冗談半分に尋ねると、照は瞬きをして「嫉妬……ですか？」と聞き返す。

「ほら、大切なお兄ちゃんが女の子とデートしてるわけじゃない？ 妹として、複雑な気持ちになったりしないかなーって」

「ええと……考えたこともなかったですね」

真剣に考え込む表情を見せる照に、水無瀬は「ごめんごめん、軽い冗談だから」と両手を横に振る。互いに距離感の近い兄妹に対し、ちよつとした揶揄を入れたつもりだったのだろう。なんとか別の話題に移ろうと頭を巡らせていると、水無瀬の不意をつくように照のほうから口を開いた。

「だって、お兄ちゃんが私以外の女の子に渡るなんて、考えられませんから」

「……………」

水無瀬だけでなく、ラムザと伊勢島も意表を突かれたように固まり、車内は静寂に包まれる。普段のおしとやかで控えめな彼女のイメージとは真逆の、強者オーラを漂わせた発言に、頭が追いつかなかったのだ。

「……テルルって、意外としたたかなんだね」

「そう、ですか？」

ただ一人ピンときていない顔の照に、ラムザは苦笑いを浮かべる。

「……ま、よくよく考えてみりゃ、こんな無茶な作戦を立てて強行しようとするあたり、肝は据わってるよな。兄貴譲りなのかもしれねえが」

伊勢島はバックミラーで照の顔を見ながら頷いて、ハンドルを大きく切る。

「地面がぬかるんでるな……この辺りで降りるぞ。準備しろ」

「はい」

これ以上天車では進めないと判断した伊勢島は、道路脇に車を停める。植物園、と書かれた看板の文字が、既に溶けて消えかかっていた。

「『晴域形成』」

調停士三人は胸元の調停士バッジに手をかけ、小規模快晴空間「晴域」を展開する。雨に塞がれていた視界が開けることで、その場所の異常性が露わとなる。

「うわ、すごいな……足突っ込んだら抜けなくなりそう」  
水無瀬が眉をひそめて、足元に広がる泥沼を見下ろす。植物園という場所の性質もあってか、園の内部はほぼ全域に渡ってぬかるんでおり、迂闊に足を踏み入れることもできなかった。

「確認なんだけど、今回は天魔を見つけたら、テルルが退治するのを待てばいいんだよね」

ラムザの言葉に、照は頭を軽く下げて頷く。「今までのやり方とは違うので、ちゃんと祓えるまで、時間をかけてしまいかもしれませんが。もしラムザさん達が危なくなったら、私のことは忘れて、自分の身を守って——」

そう言ったところで、ラムザが彼女の言葉に被せて叫んだ。

「ダメだよテルル！ そんなことしたら、テルルがここまで来た意味がなくなっちゃうだろ」

彼女の手を握るラムザに驚く照だったが、直後、伊勢島も珍しく彼の意見に同意する。

「そうだそう。せつかく俺らが各所にバレないように気を配りまくったのに、その努力を無駄にする気か？」

「あつ、えつと、そんなつもりじゃ……」

分かりやすくあたふたする照に、伊勢島は大口を開けて笑う。「そんなに慌てるな、冗談だよ。ま、半分は本音だがな」

「照ちゃん、あんまりボクらのこと舐めないほうがいいよ。そんじよそらの天魔に引けを取るような調停士じゃないから」

水無瀬も自信満々に言い放ち、照に微笑みかける。彼らなりに照が気負わないよう、気を遣ってくれたのだとわかり、照も顔を綻ばせる。

「……ありがとうございます、皆さん」

三人は領き、作戦通りの配置につく。ラムザと伊勢島が前方を進み、水無瀬が後方に注意を配る。伊勢島はその巨体に相応しい大振りの傘を振るい、水無瀬は布が大きく丈夫な守備特化の傘を用いる。前後どちらから敵襲を受けても、照を守れるような陣形である。

「Tel-Telのレーダーは、ここから北西の方角……園のマップで言うところ、熱帯植物エリアの方を指してるっぽいね」

ラムザが自身の「Tel-Tel」の仮想ディスプレイを展開し、方向を指示する。しかし、元々のエリアからして水量があつたのだろう、その地帯は周囲よりも一層ぬかるみが酷く、まるで底無し沼のようだった。

「んー、ボクや伊勢島は大丈夫かもしれないけど、ラムザが入ったら頭までスッポリなんじゃないかなあ。あ、頭じゃなくて、バケツまで？」

「どっちにしろ、間違いないズッポリだろうな」

「ぐむむ、自分たちが背高だからって他人事みたい……」

背の問題はともかく、そのまま歩いてでは渡れなさそうなのは事実だった。どうしようか、と辺りを見回す水無瀬が、あるものに目をつける。

「あ、アレなんか良いんじゃない？」

ラムザと伊勢島も視線の先を追って、えつ、と声を上げる。そこには泥水の上にぶかぶかと浮かぶ、人工物のように大きな蓮の葉があつた。

「えー、大丈夫？ オイラはいいけど、アマリとサミーは乗ったらひっくり返っちゃうんじゃないの？」

「形勢逆転が早いな……」

上機嫌そうにニヤつくラムザに冷やかな視線を向け

ながら、伊勢島は蓮の葉を引っ張ってきて、泥の上に浮かべる。

「へえ、元々熱帯エリアで使われてるものみたい。八十キロまでは平気なんだってさ……伊勢島、八十キロはない……よね？」

「……………まあ、目安だしな。絶対に八十キロで沈むてわけでもないだろ、多分」

途端に遠い目をする伊勢島。「ま、まあ最悪、伊勢島なら沈んでも大丈夫そうだし」と、水無瀬がフォローになっているのか分からないフォローを入れる。

「じゃあ、照ちゃんはラムザと同じ蓮に乗ってもらうのがいいかな。伊勢島が前方、ボクが後方から進む。それでいい？」

「……！ うん、任せて！」

照と一緒に、という大役を任されたラムザは、鼻息荒く宣誓する。「あくまで一番、照ちゃんと一緒に乗っても重さ的に安全そうだからってだけなんだけど」と、指名した水無瀬は苦笑いでぼやくが。

「オールは……傘を使えばいいか。撥水はするし問題ないだろう」

伊勢島は慎重に蓮へ乗り込むと、ゆっくりと傘を泥に挿し、ぐつ、と手前に引く。泥のせいで一分分からなくなっているが、本来の人工川の流れが残っているのか、一度力を入れると蓮は緩やかに流れに乗り出す。

「よし……ラムザ、もう来ていいぞ」

「オッケー！ テルル、動くよ」

照が頷くのを確認して、ラムザも蓮を動かす。人が乗れる大きさとはいえ、人工の乗り物よりはずっと不安定な足場だ。座っていた照が、危うくバランスを崩しそうになる。

「危ない、テルル！」

と、咄嗟にラムザが照の体が傾いた方へ回り込むと、小さな身体を目一杯に使って照の体重を支える。

「っ、す、すみません。ありがとうございます」

「このくらい何てことないよ。揺れるから、オイラに掴まってる」

照は遠慮がちにラムザの身体を掴む。ニヤけた表情を悟られないように、ラムザは至って平静を装いながら蓮を漕ぐ。

「……なんか、一寸法師みたいだな」

ボソツと呟いた伊勢島に、ラムザと水無瀬は「イッスン……？」と、きょとんとして顔を見合わせる。ただ一人照だけが意味を理解したようで、クスリと小さく吹き出した。

「えっ、何々？ なんか悪い意味なの？」

「フフ……いえ。日本では有名な、ヒーローのことですよ」

「ええっ、ほ、本当？ 喜んでいいのかなー」

ラムザは困惑した表情を浮かべながらも、まんざらでもなさそうに口元を緩める。前方では伊勢島が、ナイスフォーロー、と言いたげに親指を立てていた。

しばらく水の流れに任せて蓮を進ませていると、辺りには背の高く毒々しい色をした植物が現れ始める。少なくとも数時間は酸性雨に当たっているはずだが、種としての生命力の高さゆえか、溶けていることを感じさせない。

「ただでさえ泥沼で気持ち悪いのに、周りもこんな不気味だと、気が滅入っちゃうよねー」

水無瀬が独り言のように呟き、傘の泥を落とす。伊勢島もうんざりしたように「目がチカチカするな」とぼやく。

「……おかしいな、リーダーだとこの辺りを指してるはずなんだけど」

デイスブレイと風景を交互に見て、首を傾げるラムザ。すると、彼のレインコートを握ったままだった照が、くい、と軽く裾を引く。

「ラムザさん、上です。あと五十メートルくらい先の、ツタの上……そこから、気配を感じます」

「……!!」

彼女が指差す方を見ると、確かに天井に張り巡らされた太いツタに混じって、ヘドロのような色の、繭のよう

なものが張り付いているのが見えた。もう一、二分ほどすれば、蓮の船は真下まで到達し、落下してきた怪物に押し潰されてしまうだろう。

「ありがとう、テルル……サミー！ 構えてッ！」

「うおっ!?!」

伊勢島の返事も待たず、ラムザは傘の先端を空に向け、光弾を放つ。ボスッ、と鈍い音がした直後、天井に張り付いていたヘドロのような物体が落下し、泥水のしぶきを上げる。

「つ……全く、おっぱじめるならそう言ってくれりやいのに」

呆れ顔でラムザのほうを振り返る伊勢島だったが、彼も水無瀬も咄嗟の判断で傘を開いていたため、泥にまみれるのは免れていた。

「ごめんごめん、ちよつと時間ないなって思ったからさ。でも——ようやくお出しましたよ。テルルの実験台が」

ニヤリと笑ったラムザは、照を庇うように前に立つ。ヘドロ色の物体はぶくぶくと泡を吹きながら浮かび上がり、その全容を露わにする。

「クケ……ッ、俺様ノ縄張りに土足デ踏み込ンデ来タカト思ツタら、実験台呼バワリとハ……舐メタ真似ヲスル人間ダ」

怪物は一見爬虫類のような見た目をしていたが、特筆すべきは両手足の形状だろう。その巨体とは不釣り合い

なほど指先は細く、先端には丸く薄いヒレのようなものが付随している。奇妙なことに、その僅かなヒレの力で、怪物は水面に立っていたのである。

「ハッ、笑わせるなよ。ここはハナから人間様の場所だぜ」

伊勢島は泥を振り落とすと傘を閉じ、臨戦態勢に入る。

「……照さんよ、オダブツさせない程度に懲らしめるのは問題ないんだよな」

「は、はい。むしろ万全の状態から被えるか分からないので、少し弱らせてもらえると助かります」

「よしきた……眼の前の怪物に何もできないってのも、癪だからな」

ひそひそ声で照との会話を交わした伊勢島は、口元をわずかに緩めると、大振りの傘を大剣のように両手で構える。

「クケケ……馬鹿十人間ダ。コノ泥沼ハ俺様ノ領域……貴様ラにハ近付クコトスラ出来マイ」

天魔は前足を水面に叩きつけ、泥飛沫を上げる。波打つ水に揺らされた蓮は不安定にぐらつく。

「わわっ!？」

「おおっと……チッ、この足場じゃ限度があるな……」

震源地である天魔に近付くほど、蓮に伝わる振動が大きくなり、立っていることすら難しくなる。加えて、蓮の動きは水の流れにのみ頼っていたため、傘で漕がなけ

れば目標に近付くことすら敵わない。

「どうする、伊勢島? せめて揺らすのを止めさせないと、照ちゃんも集中して力を使えないと思うよ」

後方からの水無瀬の言葉に振り返ると、照はラムザに掴まって倒れないようバランスを取るのに精一杯といった様子で、とても集中できる状態には見えなかった。

「そうだな……悪い、水無瀬、照さんを頼む。ラムザを借りたい」

「借り……?」

首を傾げる水無瀬に構わず、伊勢島は揺れる水面を一瞥し、自身に言い聞かせるよう呟く。

「ちイと危険な賭けだが、さつき漕いだ感触からすれば、ある程度泥が堆積しているはず……」

そして伊勢島は軽く助走をつけ——泥の中へと自ら飛び込んだ。背丈のおかげで全身は嵌らず、腹のやや上までずっぽりと泥に浸る格好となる。

「ええっ!？」

血迷ったような同僚の行動に目を丸くする水無瀬だったが、伊勢島はさらに続ける。

「来い、ラムザ!」

「っ……!」

伊勢島は泥の中から両手を差し出し、細い目でラムザを見据える。彼の意図を察したのか、ラムザも唾を飲み込み、目一杯の助走をつけ、彼の元へと飛び込む。伊勢

島は両腕を伸ばし、ボールを抱えるかのように、ラムザの身体を手中に収める。

「——ナイスキャッチ、サミー！」

「つたりめーだろ……このまま行くぞ、ラムザ」

ラムザが頷き、バケツを被り直したのを見て、伊勢島はラムザを抱えたままの手を大きく引いた。泥の中で足を踏み込んだのか、伊勢島の体がやや沈んだように見えた。

「どっ……せええええいっ！！」

「えっ、ちよっ……伊勢島っ！？」

強肩から弧を描くように放たれた剛速球——もとい、鉄バケツを被った人間ミサイルは、抜群のコントロールで怪物の頭へと一直線に向かってゆく。天魔も突如向かってきた空飛ぶ鉄バケツに面食らったのか、間の抜けた顔のまま固まっていた。

「ゴッ……！！？」

ラムザはバケツの持ち手をしっかりと押さえつけ、怪物の顔面に頭突きを食らわせる。

「よし、ストライクだな」

「ストライクだな、じゃなくて！」

満足げに額の汗を拭く伊勢島に、一部始終を眺めていた水無瀬が納得のいかない表情で訴える。

「ああ、そういう水無瀬にはまだ見せたことがなかったか。俺たちの連携技、通称『バケット・ミサイル』だ」

「連携って言うには片方の負担が大きすぎない……？」

どうもラムザが投げられ損のような気がしてやまない水無瀬だったが、まあ本人たちが納得しているなら良いか、と気を改める。手段はともあれ、接近の難しい相手に一打を与えられたのは確かだ。

「グウッ……巫山戯<sup>ワザ</sup>タ真似ヲ……！」

声に怒気を含ませ、天魔は伊勢島にターゲッ<sup>タ</sup>ットを定める。大口を開け、何かを吐き出そうとした天魔だったが

「ちよつとちよつと、もうオイラのこと忘れちゃったの？」

頭上から響くあどけない声に、目だけを上へ動かす天魔。だがその姿は視界の端を掠めたかと思うと、すぐに行方を眩ませてしまう。

「……グッ！？」

その直後、天魔は背に横からの衝撃を受けてよろめく。反撃に出ようと相手の姿を捉えようとするが、その隙もなく反対側から、二度目の衝撃が走る。

「ほらほら、どうしたの？ 反撃してみなよ、天魔さんッ」

怪物の背を陣取ったラムザは、小さな背丈ですばしっこく動き回り、一方的に縦横無尽の乱撃を食らわせる。彼の傘は一般的なものと比べても短い丈のものだが、おかげで短剣のように小回りが効き、ラムザのスピード重

視の立ち回りを妨げない仕様になっている。

「クッ……目障リナ蠅ガ……！」

天魔は纏わりつく虫を叩き落とすように腕を振り回すが、大ぶりの動きはラムザを捕らえるには遅すぎた。そうして彼に気を取られているうちに、伊勢島の大太刀——もとい大傘が、怪物のすぐ目の前まで迫っていた。

「時間切れたな」

天魔が目を見開くのと同時に、伊勢島は傘を振り抜く。無言のアイコンタクトでタイミングを合わせ、頭上ではラムザが傘を下向きに構えて、大きく飛び上がる。

「だああああっ！！」

地上と空中、ふたつの方向からの斬撃が、天魔の体を交点に走り抜ける。

「グオオオオッ！」

山が崩れるような呻き声を上げ、怪物は泥に沈む。烈しい泥しぶきが上がり、水無瀬は慌てて傘を開き、照を泥の雨から守る。

「ふう……って、さ、サミー……！ 受け止めてよっ！？」

攻撃の反動で跳ね上がったラムザの体は、泥沼へと一直線に落下していた。名を呼ばれた伊勢島は「おっと」と我に返り、手を大きく伸ばして片手でラムザを受け止める……が、

「うおっ」

「えっ」

くい、と伊勢島の手首が下を向き、ラムザは丸めていた背中から、ぼちやり、と泥水へ落ちる。伊勢島は一瞬で青ざめた表情を浮かべると、畑から野菜を引き抜くように、素早くラムザを収獲——もとい、救出した。

「ぶはっ！ ……うう、服が泥だらけだよ」

水浴びした犬のように身震いして泥を落としたラムザは、バケツ越しに伊勢島へ抗議の視線を向ける。

「悪い悪い、その……なんだ、前はもっと、軽かった気がしてだな……」

「言い訳しない！ ていうか何、オイラが太ったっていうの！？」

「……成長期が来たんじゃないの？」

「えっ、本当！？ サミー、オイラ背伸びてる！？ 伸びてるってこと！？」

「感情が騒がしいな」

凸凹コンビのやりとりを呆れ半分、微笑ましい気持ち半分で眺めていた水無瀬。すっかり気の抜けた様子の二人だが、本来の目的は——と立ち返り、背後にいる少女へ目を向ける。

「照ちゃん、どう？ 今の一撃で、あいつも大分弱ってると思うけど」

今回の出撃において、水無瀬ら調停士たちの役割は、天魔の退治ではない。照に『天ノ巫女』としてのさらなる力を、何らかの形で引き出させることであった。



「……すみません、何か掴めそうな感覚はあるのですが……もう少し、時間がかかるかもしれません」

「大丈夫だよ、テルルのためならオイラ、何時間だって粘るからね」

蓮の上に降り、泥にまみれながらも胸を張るラムザ。

「ありがとうございます」と微笑んだ照に、バケツの下で頬を緩ませる。

「クケケッ……成程ナ。妙ナ陣形を組ムと思エば、其ノ小娘ヲ守ッていタのカ」

「！」

ぬるり、と泥の中から顔を出した天魔に、調停士三人は再び構えをとる。だが怪物の目はすでに彼らではなく、その中央に位置する調停士ではない少女——照を見据えていた。

「チッ……爬虫類みたいな癖して、ずいぶん耳が良いんだな」

伊勢島がうんざりした様子で眉間に皺を寄せ、細い目をさらに細める。怪物がある程度の知能を持っているならば、この後の行動は一つしかないだろう。

「然ラバ……小娘、貴様カラ先に仕留メテヤル！」

「やっぱりそうなるよな……っ！」

天魔は大きく息を吸い込むと、滝のような泥水を勢いよく吐き出す。傘も持たない無防備な照に向かう泥水は、彼女に降りかかる手前で阻まれる。

「……そう簡単に、ボクの壁を突破できると思わないことだね……！」

照の前に立ち塞がった水無瀬が、大ぶりの傘を開いて濁流をせき止める。守りに特化した水無瀬の傘は、激しい水圧をものともせず堪える。

「照ちゃん、ボクらのことは心配しないで。むしろ狙いが一方向になって、わかりやすくなったし」

「……すみません、皆さん……もう少しだけ、お願いします」

照は一言頭を下げると、目を瞑って精神を集中させる。

その間で天魔の気を引くよう、伊勢島とラムザは左右に分かれ、蓮の葉で天魔に近づく。

「はあッ！」

ヒレの部分を叩く伊勢島だが、皮膚の硬さで傘身が跳ね返されてしまう。

「つく……どうにかして顔のまわりを叩かねえと、効き目は薄そうだな」

時を同じくして、ラムザもそれに気付いたのか、ヒレへの攻撃を断念する……かと思うと、蓮の葉から助走をつけ、天魔の左手へと飛び乗った。

「ラムザ!？」

「外から攻めても効かないんでしょ……だったらもう一回、頭を狙うしかない！」

「それはそうだが……一人で突っ込むのが、危険だって

言ってんだッ」

伊勢島は全速力で蓮を漕ぎ、怪物の顎下まで向かう。いくらラムザにスピードがあるとはいえ、彼一人にターゲットを絞られてはどうなるか分からない。

「やああっ！」

そんな相棒の心配をよそに、素早く怪物の体を駆け上ったラムザは、怪物の頭上で飛び上がり傘を突き刺す。彼らの狙い通り、ヒレのときはびくともしなかった巨体が、唸り声を上げて僅かによろめく。

「やった……！」

確かな手応えを感じたラムザは、勢いに乗って再び跳躍し、傘を振り下ろす。だがその瞬間、怪物の目がぎょろりと上を向き、上空のラムザを捉える。

「まずい……！」

視線の動きに気付いた伊勢島は、すぐさま怪物の顎先に太刀を食らわせる。しかし、すでに怪物はラムザをロクオンしており、眼下の伊勢島には目もくれない。

「クソ、だから先走るなど言ったのに……！」

元々の体格差や扱う傘面積の大きさなどから、伊勢島が敵の注意を引きつけ、その隙にラムザが攻撃するという戦法が、彼ら二人には適していた。それが逆になれば——伊勢島は嫌な想像を振り払うように傘を振るうが、怪物は愚直なほどに視線を下げない。

「小蠅如キガ……鬱陶しい！」

ラムザはそこでようやく、怪物の目が自身に向けられていることに気付く。だが落下を始めていた体は、何に抗うこともできず落ちていくのみであった。

「しまっ——」

「死ネッ……！」

天魔は腕を振り上げ、巨大な掌で頭上の調停士を払いのける。ラムザの小さな体はいとも簡単に宙を舞い、そのまま泥の海へと墜落する。

「ラムザっ……！」

伊勢島は直ぐにラムザの元へと蓮を走らせる。それを止めるでもなく、天魔はニタリと口を広げた。

「クケケ……早ク助ケネバ、骨モ残ラズ融ケテ仕舞ウゾ」

「なっ……まさか、この泥も……!?」

怪物の余裕めいた言葉に、ハッと息を呑む伊勢島。天魔の降らせる雨によって、泥水が溢れかえっているのだとすれば——この泥沼は、いわば微弱な酸性沼なのだ。元々の水量もあって多少の中和はされていると思われるため、防具越しであればさほど影響はないだろうが、生身で長時間曝されればただでは済まないだろう。

「……クソッ！」

伊勢島は必死に落下地点へと蓮を漕ぎ、泥にまみれるのも厭わず、足や手を突っ込んでラムザを探す。当然、天魔の気を引くことなど考えている場合ではなかった。

「グオオオッ！」

「っ……！」

その間にも、天魔は再び照へと狙いを定め、泥の弾を吐き出す。水無瀬が一投も逃さず防ぎきるも、守るので手一杯であり、反撃に転じることができずにいた。

「ちっ……さすがに、一人だとしんどいね」

額の汗を拭う水無瀬。対して天魔は劣勢を嘲笑うかのような、不敵な笑みを見せる。

「クケ……シブトい奴ダ。ダが——」

天魔は上半身を大きく反らすと、水面を両手で力強く叩き付けた。

「ぐっ……！」

「きゃっ……！！？」

水しぶきこそ傘で防いだものの、水面の振動で蓮が揺れ、足下が不安定になる。集中を保っていた照も、張り詰めていた糸が切れたように、その場に座り込んでしまう。

「照ちゃん！？」

悲鳴を上げた照に一瞬気をとられ、水無瀬が振り返る。その隙をついて、怪物の吐き出した泥の弾が、水無瀬を突き飛ばす。

「うぐっ！」

衝撃で傘が手から離れ、水無瀬は仰向けに倒れる。大した威力ではなかったが、照を守る「壁」を退かすのはそれで十分だった。

「クケケ……其ノ小娘ニ何ノ価値ガ有ツタのカ知ラヌガ……此レデ終イダ！」

「……照ちゃん！」

天魔は喉奥に濁流の渦を巻き、照へと大口を開く。急いで立ち上がろうとする水無瀬だが、弾けた粘性の泥が足元を覆い、身動きがとれないでいた。

「……っ！！」

やたらとスローに見える濁流の前に、水無瀬は目を瞑ることしかできなかった。どくどくと脈打つ脳と心臓から、目を背けるように。

「……ハアッ、ハアッ……ハアッ……」

明らかに照のものではない、荒い息遣いに水無瀬は恐る恐る目を開く。一瞬、そこにあったものが何かわからず、思わず目を擦る。

「……テルル、無事……？」

「……は、はいっ」

照の前に立って傘を広げていたのは、全身が泥にまみれて銅像のようになったラムザであった。照のほうを振り返り、もはや穴の位置すらも分からなくなったバケツから、「良かった」と力なく微笑みを見せる。

「ラムザ、お前……！」

「此ノ泥ヲ泳イダと言ウのカ……人間風情ガ」

伊勢島と天魔が揃って驚愕の表情を浮かべる。しかしラムザのほうも無傷というわけではないらしく、痛みに耐えかねた様子で呻き、片膝を折る。

「ラムザ、無理するな！　ここは俺達に……」

「……テルルは」

伊勢島が見かねてラムザの元へ向かうが、ラムザは小さく呟くと、再び足を開いて傘を構える。

「……テルルには、指一本触れさせない……テルルは、オイラが守るんだ……ッ！！」

ラムザは強い意志を宿した瞳で、怪物を睨みつける。その言葉は、ラムザ自身を鼓舞しているようでもあった。

「クケ……其ノ身体デ何が出来る？　貴様ノ身体にハ、

既ニ毒ガ回ッテイルのト同じコト」

泥は雨よりも酸性こそ弱いものの、粘度があり簡単には拭えない。今この時も、一度泥が付着した皮膚は、じわりじわりと焼けるような痛みに襲われていた。

「其レデモ立ツト言うナラ……望ミ通り、殺シテヤル」

天魔はゆっくりと口を開き、砲撃の構えをとる。ラムザはひりつく腕を無理くり持ち上げ、傘を開く。天魔の口からはピッチングマシンのように、泥の弾が連続で放たれる。

「ぐ……、この……っ！」

泥の弾はラムザを弄ぶように、異なる方角から照を狙い撃つ。必死に傘を振り彼女を守るラムザだったが、傘

が弾を受け止めるたびに手先が痺れ、傘を握っている感覚すらあやふやになっていく。

「……クケッ、何故ソコマデシテ小娘ヲ庇ウ？　自ラの命ヲ擲ツ価値ガ有ルのカ？」

天魔は気味の悪い笑い声を上げながら、息を切らしてよろめくラムザを嘲る。

「なんで、って……決まってるだろ」

だが、ラムザはそんな天魔を逆に揶揄うかのように、ニツと歯を見せる。

「オイラは、テルルを信じてるからだ。きっと……いや、絶対、テルルがお前も、この雨も……祓ってくれるってね」

「……！！」

そのとき、ラムザの後ろで集中を続けていた照が、はつと目を開いた。彼女の体の内に、熱を帯びた欠片が入ってくるかのような、不可思議な感覚を覚えたのだ。

「クケケッ！　何を言ウカト思エバ……笑ワセル！

精々ソノお目出度イ頭ノママ、あノ世ヘ行クンダナッ！」

天魔は反り返って高笑いしたのち、掌を上空から振り下ろす。避ける、と伊勢島がラムザの名を叫ぶが、足を踏み出そうとした途端、崩れるように膝をついてしまう。

ここまでか、と彼は自らの命運を悟ったかのように、水面に映る影を見つめていた――

「——だめッ!!」

少女の絞り出すような叫びと共に、その場にいた全員  
の視界が、まばゆい光に眩んだ。次の瞬間、天魔の腹部  
へ光の柱が走ったかと思うと、光は型抜きのように呆気  
なく、その巨体をくり抜いてしまった。

「——ガ、はッ……?」

怪物自身も何をされたのか分からぬまま、穴の開いた  
腹を見下ろす。痛みを感じる暇もないままに、全身の筋  
肉と神経が動かなくなっていく。

「……照、さん……なのか?」

その光を放ったのは、間違いなく照であるはずだった。  
だが、伊勢島も水無瀬も、その姿を見ては自身の目を疑  
うように瞬きを繰り返した。

彼らの視線が追っていたのは、照の瞳であった。水の  
ように透き通った色をしていた、はずの両目が、遠目か  
らでもはっきりと分かるほど鮮やかな赤色に染まってい  
た。その焦点も伸ばした右手の先——天魔のほうをはっ  
きりと見据えており、まるで視えているかのようにであっ  
た。

「災雲より出でし魔よ、その身に孕んだ穢れを清め、母  
なる海の元へと還れ——」

照が呪文のように言葉を唱えると、指先から放たれた  
光線が、天魔を円状に囲い込んだ。

「——日輪祓へニチリンバレ——」

「ギッ……!!?」

天使の輪のように光り輝く円が、天魔の体躯を締め付  
けるように収縮していく。溢れ出す光に曝された天魔の  
皮膚が、みるみるうちに焼け爛れ、縮んでいく。

「コ、コレハ……マサか、タ……太陽、ノ……」

自分に施された術の意味を悟るのと同時に、天魔の身  
体は色褪せ、どろどろと融けていく。「馬鹿ナ……太陽  
ノ力を、人間如キガ扱うナド……グウッ!」

怪物は目を見開いて照を見つめていたが、突如として  
体内が膨張し、短い断末魔と共にその肉体が弾け飛ぶ。

霧散した肉片は、そのすべてが円環の光に照らされ、一  
瞬にして蒸発してしまった。

「……凄………たった一瞬で、天魔が……」

「……はは、凄すぎて笑いしか出ねえな……」

一部始終を眺めるしかできなかった水無瀬と伊勢島が、  
すっかり晴れ渡った空を呆然と眺め、口々に言う。

神聖な光に曝された影響なのか、本来ならしばらくは  
残るはずの天魔の影響——吐き出した泥や濁った川の水

——が、最初からなかったことのようになっている。さ  
すがに雨に融かされた植物や看板などはそのままだが、

ぱつと見では既に本来の植物園の姿を取り戻しているよ  
うにさえ見えた。

「——あ、れ……私……」

天魔の消失を境に、照の赤く染まった瞳が、ゆっくり

と透き通る水色に戻っていく。すっかり元に戻った瞬間、全身から力が抜け、その場に座り込んでしまう。

「……テルル！」

振り返ったラムザが足を這わせたまま照に近づき、正面から彼女を抱きしめる。全身を覆っていた泥は落ちきったものの、そのせいで負った傷跡も痛々しく剥き出しになっていた。

「ラムザ、さん……私、よく覚えていないのですが……ちゃんと、天魔を祓えたんでしょうか……？」

「そうだよ、君のおかげだよ。……助けてくれてありがとう、テルル」

「……そう、でしたか。それは、良か——」

ラムザの言葉に安堵の笑みを浮かべた照だったが、その直後、言葉の途中で声を切らし、眠るように気を失ってしまう。

「——あれだけの力を使っただ、負担も相当なものだろう。お疲れさん」

ラムザが声のほうを見上げると、伊勢島と水無瀬が泥の抜けた川を横切り、彼のもとへ近付いてきていた。

「ラムザ、無事？ 今その運動かすから、ちよつと待ってて」

「うーん、無事といえば無事だけど、もしかしたら歩けないかも……救護班呼んでもいい？」

ラムザは折り曲げた足を無理やり立たせようとするが、

ひどく痺れたように感覚が薄く、力が入らない。立つくらいなら何とかなるかもしれないが、歩くとなると厳しそうだった。

「馬鹿、ここまで来て見つかる気か？ それに、ここは照さんのおかげで泥も浄化されてるが、外まではおそらく届いていないだろう。あのぬかるみを、天車で突破するのは無理だ」

「ええっ、じゃあどうすれば……」

不安そうに眉をひそめる水無瀬に、伊勢島は自信満々に親指を立てる。

「心配するな。おそらく救護班よりも早く、かつ誰にも見つからず……いや見つかるかもしれないが……帰る方法が、一つだけある」

「げっ、まさか」

そこまで聞いて、ラムザは何か思い当たる節があるのか、口元を両手で覆う。なにに、と無垢な表情で尋ねる水無瀬に、伊勢島がニヤリと微笑んで言い放つ。

「——爆走運転（テンシヤ・ミサイル）だ」

\*

「うう、生きた心地がしなかった……アマリ、平気？」

「……話しかけないで、多分吐くから」

すっかりグロッキー状態の水無瀬を横目に、伊勢島は

満足げな笑みを浮かべ、車を降りる。「ふう、久々に飛ばすと爽快だな。こういう時じゃないと合法的に法定速度を破れないからな」

「うわあ、清々しいほどの職権濫用……」

ふと不安になったラムザは後部座席を振り返る。シートベルトを着けられた照は、規則的な呼吸をしながら目を瞑ったままだ。怖い思いをさせていなくて良かった、とラムザは安堵のため息をつく。

「体に異常がないかは少し不安だが……眠ってくれたのは好都合だったかもな」

そう言うと、伊勢島は照のシートベルトを外し、軽々と肩に担ぐ。

「ちよつと、テルルのこと雑に扱わないんだよ、オイラじゃないんだから」

「……自分が雑な自覚はあるんだ」

ラムザの苦言に笑い声を上げて、分かかってら、とのたまう伊勢島。「照さんのこと運んだら戻ってくるから、水無瀬の看病でもしといてやれ」

「おつかしーなー、どつちかというとオイラのほうが要救護者なんだけどなー」

口をとがらせるラムザに背を向け、伊勢島がその場を離れる。が、すぐに立ち止まり、ちらりと車のほうを振り返り、「ラムザ」と彼の名を呼ぶ。

「……今日のお前、なかなか格好良かったぞ。頑張ったな」

「……何、オイラのこと子供扱いするつもり？」

ニヤ、と口元を歪ませたラムザに、そういうことじゃねえけど、と呟く伊勢島。それが聞こえてか聞こえずか、ラムザのほうも小さく、独り言のように呟いた。

「……ありがと、狭弥刀」

\*

その日の晩。医務室の看護師らも出払った、夜中も一時を回ろうというころ。満月に近い円が、暗がりの中に妖しく浮かんでいる。

すやすやと寝息を立てる照の側に、何者かがそうと忍び込み、その姿をじつと見つめていた。

照は伊勢島によって医務室に運ばれた後、念のため身体検査を行ったが、特段の異常はなく、とはいえ暫くは休息をとることになっていた。

しかし、影は知っていた。彼女の中に眠るものの胎動を。それがもう間もなく、目覚めるだろうということも。

「——君に逢える時を、楽しみにしているよ」

そう囁いて、影は音もなく微笑む。そして彼女の——照、ではなく、全く別の——影にとっての、彼女の名を呼ぶ。

イヴ、と。

〈続〉